私の履歴書

江頭匡一
えがしら きょういち

①

ロマン半世紀

私の書斎に一冊の本が置いてある。作家の城山三郎氏が書かれた「外食王の飢え」という小説だ。

この小説は、ロイヤルホストの東京進出を機に、東京近郊でファミリーレストラン各社の激烈な陣取り合戦が繰り広げられた一九七〇年代後半の外食産業を舞台に、そこでの覇者を目指した男たちの野望と情熱を主題にしている。そしてその主人公で、終戦直後の米軍指定商人から身を興し、一代でわが国有数のレストラン・チェーンを築き上げた倉原礼一のモデルが私だというのである。

私は週刊現代で連載が始まったとき目にしたが、最初の二回ほどで読むのをやめた。確かに大学の卒業論文を破り捨てるストーリーなど事実に近いものも少なくない。だが、主人公、倉原の人物像があまりに極端に書かれていることが心に引っ掛かって仕方がなかった。特に倉原が「自分が世界の中心だ」というくだりがそうだった。

このようなことを書かれたら、社員たちまでが本気にしかねない。「お互いの存在を尊重したうえで世の中が動く」という私の考え方を誤解されることになる。ということで、当時の北口誠企画室長兼秘書役が城山氏を訪ね、「事実とは違うことを書かれては困ります」とお願いした。

そのとき、城山氏は、「これは小説であって、大説ではありませんので、どうぞお気になさらぬようにと、江頭さんにお伝え下さい」と言われたという。その後、単行本になったサイン入りの自著を持って福岡に来られたときも、城山氏は「これは小説ですから」とほほ笑まれるだけだった。それが書斎の一冊だ。いまだにその本を開いていない。

外食産業育成に情熱

福岡の空港食堂が出発点

しかし、思えばこれまでの私の生涯は、小説の倉原のように、水商売と陰口をたたかれていた飲食業を、何とか国民生活の向上に役立つ立派な産業に育て上げようというロマンにかけたものだった。

五〇年（昭和二十五年）、福岡の地にロイヤルを創業してから、来年で半世紀を迎える。翌五一年には民間空路が再開され、福岡の米空軍基地から日本航空の福岡―羽田線の第一便が飛び立つのと同時に、空港のカマボコ兵舎の日本航空営業所に食堂を開いた。

それを出発点に機内食、ファミリーレストランのチェーン化を支えたセントラルキッチン（集中調理工場）の建設、大卒社員の定期採用、株式上場など、「日本の外食産業では初」という事業に絶えず挑戦してきた。

最近の筆者

志をもってひたすら走り続けてきたことが、ロイヤルを今日まで成長させたし、外食産業を市場規模約三十兆円と日本有数の産業に育て上げることにも寄与をしてきたと思っている。

またたびたび病魔に侵されて三度ならず死線をさまよい、満身創痍（そうい）の身にもなった。こうした人生を今日まで切り開いてこれたのも、多くの人々との運命的な出会いがあり、折にふれ事業家としての私を支えていただいたからこそだ。

作家の井上靖氏は「孔子」の中で、「〝仁〟という字は、人偏に〝二〟を配している」と書き、何かの縁で触れ合った二人の間には「お互いに守らなければならぬ規約とでもいったものが生れてくる。それが〝仁〟というものである」と、孔子に言わせている。仁という言葉が好きで、男の孫にも名付けたほどだが、私の人生を通じても、つくづく人の縁の大切さを感じる。

人の縁と運に恵まれてきたことにしみじみと感謝しつつ、自らの「小説ならぬ大説」を書いていきたい。この大説を書き上げたときに初めて、書斎にある小説「外食王の飢え」を開いて、ゆっくり読みたいと思う。

（ロイヤル創業者取締役）

＝題字も筆者